

春燈

12_{月号}

December 2010



主宰の句

安立公彦

ひややかに茜草がまとふ昼の雨

をさな児に育つ有心やけふの月

鉦叩夜々来て鳴けり勤しめと

さながらに江戸の雅の野菊径
(小石川後樂園二句)

雨なれば傘に触れもし初紅葉



夜の書庫にユトリ口返す雪明り

『午前午後』昭和四十二年

『午前午後』は第六回蛇笏賞受賞の句集。ユトリ口は「白」を基調として、パリの場末の風景を描き、その時代の画家とは隔絶した世界を築く。敦はなぜユトリ口に魅せられたのか。先生は「花鳥とともに在る人間」の俳句を唱導した。ユトリ口の絵も、先生の俳句も流行を追わないことに共通点がある。市井の哀歓、通俗に隔ることのない詩情が人の心に長く生きつづけてゆくのである。

小島 禾汀

安住 敦の句

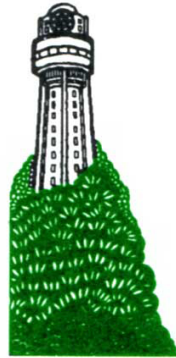
しぐるるや駅に西口東口

『古暦』昭和二十一年

前書に田園調布とあるように、この句は東急東横線田園調布駅が舞台である。ある時雨の日、うっかり出口をはつきりさせなかったために、待合させた相手の方に大変な迷惑をかけたとのこと。しかしこの句を石川桂郎氏はもっと艶な事情に鑑賞されたようだ。よい句は間々いろいろなドラマを内包しているものである。田園調布駅はすっかり変って、まさに往事茫茫の感であるが。

白 杵 游 児

燈下集



○ 荒井 慈

朝寝坊の田園詩人小鳥来る
朝顔のもらひし水に応へけり
娘より母の元氣や竹の春
柘榴爆ぜ舞踏会へと繰り出せり
味のなき失樂園のりんごかな

○ 佐渡谷 秀一

齒の治療短く済むや処暑の風
ジョギングの帽子目深に野分かな
虫時雨冷たき菜イを並べけり
秋高し古墳に隣る野球場
燕去ぬ商店街の定休日

○ 横田 初美

白樺の夜目にも白し涼新た
鯖雲や海を遠くに塩の道
健脚な男の背中草の花
道くさの子等に親しき猫じやらし
稲雀忙中閑のなかりけり

雁渡し陶土を被ふ濡れ布巾
土宥め壺立ち上ぐや鯛雲
轆轤の碗離つ一糸の爽気かな
コスモスや夢のいろなる素焼壺
雨の虫窯のあたりに鳴きぬしが

○ 沼田桂子

雲だけは秋のかたちになつてゐる
あれほどに焦がれし秋のあたりまへ
子とつくる焼菓子秋のページ
宵闇の夫ささやかに酔ひにけり
満月のひかり切りとる屋根の影

○ 秋場貞枝

虎斑木菟二重瞼の頸回す
とら河豚の眼閉づるや袋糶り
押し返す草木のうねり野分かな
碧空のぞく北山初時雨
地の果てに消ゆるいのちや冬の虹

○ 宮田豊子

秋時雨やみて杜の香生まれけり
野菜スタンド薑甸の顔をして
花野行くマイナス思考封じけり
温度設定思案中なり秋の神
よく軋む窓辺の椅子や居待月

○ 佐々木新

桐一葉門田に夕日あかあかと
偏西風迷走蛇行秋暑し
廢線の鉄路を過ぎる穴まどひ
山寺へ萩のトンネルくぐりけり
ランプ宿添水はゆるく時きざむ

○ 呂秀文

やぶれ傘路傍に拾ふ秋しぐれ
蓑虫は風に命を預け居り
尾行てふ至難の道や柿落葉
ゆれ易きひとの情や秋桜
ひとり立ち出来ぬ諦め蔦紅葉

○ 呉文宗

竹伐つて思ひあたる節ありにけり
菊人形刀持たざる負ひ目かな
竹の春観音像もそよぐかも
扇置き蠅頭のルビに目を凝らす
新米やお箸休めにおみおつけ

春星賞受賞作（20句）

水無月 都丸美陽子

雲湧くや稜線青き雪解富士

赤き実を啄む鳥や半夏生

岩清水袖をぬらして掬ひけり

樹林いま鳴交しゐるほととぎす

梅雨の蝶さびしき昼をさまよへり

風音に耳すましゐる子亀かな

隠沼や道もをはりの草茂る

落し文拾うてみたし師の忌なり

あぢさゐの紺師の色と思ひけり

塔の影ゆらぐ水面や風青し

かはせみの青ひとすぢの速さかな

ひたすらに罎を張る蜘蛛を払ひけり

舌足らずの夏鶯や雨を呼ぶ

栗の花雨本降りとなりしかな

売切れしビニールの傘花うつぎ

十薬の命ひしめく香なりけり

雨やんで柘榴の花の朱を極む

風の百合こころ揺るがすひと日かな

行末はとまれ人恋ふ火取虫

水無月や遠のくは師のうしろ影

当月集

安立 公彦選



○ 清水美子

秋澄むや木陰に祀る水の神

歯切れよき男の言葉天高し

観能の余韻昂る良夜かな

こぼれ萩うちに秘めたる熱きもの

いなつるび窯変天目応へけり

○ 片山博介

流木はトリトンの骨秋の浜

燕去つて遠目差の鬼瓦

酸橘切るや月の色して香に顕てり

冷やかに油滴天目星を生み

五能線今宵銀河に接続す

○ 矢口笑子

色鳥やバッグひとつの旅上手

やはらかに肩抱かるや秋風裡

マスコミに煽動されし轡虫

うなだれて雨遣り過ごす案山子かな

出来秋や化粧ポーチに胃腸薬

○ 川崎真樹子

青いろを空に捧げて白桔梗

木の実降る縄文人の起き伏しに

コスモスの風が嫌ひといふ秘密

詫び状や冷ゆるに委す指の先

しづごころ月の光に身を梳かれ

○ 都丸美陽子

啄木鳥の川打一打や過去穿つ

寄らず過ぐる子の住む町や秋の風

青北風や自愛せよとの一旅信

伝言はルージュで描く無月かな

十六夜やひとつ灯のこす睡るまで

春燈の句

安立 公彦選

さやけしや夜の映像の馬頭琴

神奈川 犬嶋テル子

ホテル名の傘さし秋の上高地

なき父のたばこ「敷島」敬老日

はらからも二人となりし衣被

風立ちてみそはぎ一氣に華やぎぬ

つくつくし己が挽歌を鳴きやます

赤黒く頭垂れたり鶏頭花

虫すだく屋敷林より灯のひとつ

さりげなき別れの言葉風の萩

新涼や時を忘れて峠茶屋

筑波嶺は空の浮島秋霞

新涼のベッドに五体投げ出せり

九尾の狐駆くる那須野や天高し

御用邸につづく山路や草紅葉

人生に寄り道多き花野かな
宿坊の枕なじまず虫しぐれ

新涼や無心に磨く飾り窓

帰る子に持たす梨のふたつほど

台風や電話の母を案じて

常備薬余分に持つて秋遍路

酔芙蓉けふを正しく了ひけり

花の香の木造車両秋彼岸

星近き四万十の宿ちちろ鳴く

松茸の檜葉青々と届きけり

老犬の迷路ゆくかに秋暑し

こほろぎやいつもの径の行き戻り

秋雨や珈琲豆を挽くかをり

聞くともなく聞こゆる話そぞろ寒



東京 豊谷ゆき江

神奈川 浅木 ノエ

千葉 西岡 啓子

埼玉 大文字孝一

東京 布村 松景

東京 小島 昭夫

余言

安立公彦

山女宿明治のランプ灯しけり

萩原 すみ

溪流近くの湯宿。その溪流には山女も棲む。おそらく釣人に長く親しまれて来た宿なのだろう。その宿には今でも古いランプが点り、旅人に明治の郷愁と安らぎを供しているのだ。作者は兵庫県豊岡市に住む。今年九十四歳。その歳を感じさせない作品の気力は、私たちに一層の励みを与える。

老蠶螂入日にかざす鎌なりけり

池園二三江

「老蠶螂」がいい。この上五で読書は一句の世界に無理なくとけ込むことが出来る。「入日にかざす鎌」も、蠶螂の動きを良く描写している。

秋の暮つ方、動きの鈍くなった蠶螂が鎌を翳している。その姿にはかつての勇壮さはない。作者はその蠶螂の「老い」に思いを寄せつつ、場面をクローズアップする。

柿一枝持ちて嫁ぐが慣とや

上野 昌子

民謡にも、「田水落して稲扱き終えて 明日はこの子に嫁が来る」という一節がある。むかしの農村の嫁取りは秋季と決っていた。この句の娘は、「柿一枝」を持参するのが習わしの土地に育ったのか。時間を巻き戻したような懐かしさの感じられる句だ。

秋澄むや声上げて寄る陶器市

柴崎 富子

陶芸が静かなブームを呼んでいるぞうだ。極めるのにこれほど奥の深い世界はない。また一方誰でも参加出来るのも陶芸の良さである。作者もその陶芸に魅入られた一人だろうか。「声上げて寄る」に、陶芸への実素直な思いが出ている。

陶芸の名所と言えば関東近辺では、益子（栃木県）や、笠間（茨城県）が知られている。十一月に入ると秋の陶器市が始まる。勿論全国的には、九谷、瀬戸、信楽、唐津、有田など名所は多い。この句、「秋澄むや」に、集う人たちのひとりの満足感が出ている。知人の奥さんも陶芸を始めて五年目、目下身辺は創作碗に満ちていると聞く。

同時発表の、〈墓石は小さきが佳し去來の忌〉の句。去來の墓の小ささは、〈凡そ天下に去來程の小さき墓に参りけり虚子〉の句が示す通り。この上五中七は人生の真理を衝いている。併せて去來への敬慕の情も感じとれる。

影長くふたりで仰ぐ今日の月

古澤恵美子

いい情景だ。「ふたりで仰ぐ」が全てを物語っている。こういう句を見るときは、一句の世界に「我」を消して入りこむことで、読者もまた作中の人となり、名月の青いひかりの中に身を置くことが出来よう。

「ふたり」が誰かなどという詮索は要らない。しかしこれはやはり生涯の伴侶である夫君だろう。

軒下へ謝意の旋回燕去る

卯木 堯子

歳時記には、燕は春社に南方から来て秋社に歸る、とある。そう言えば九月も中旬を過ぎると燕の姿を見ない。

掲出句、今しも巢を営んでいた軒下を離れようとする燕を、「謝意の旋回」として、その様子を正確に表現している。同時にその帰燕をあたたく見守っている作者の人となりも感じられてくる句だ。

流木はトリトンの骨秋の浜

片山 博介

「トリトン」はギリシヤ神話に登場する半人半魚姿の海神。作者は今秋の浜に打ち上げられている流木を見て、その流木を「トリトンの骨」に擬した。その思いの奥には、かつて柳田国男が、伊良湖岬に流れ寄る椰子の実を見て、『海上の道』を著わし、それを聞いた島崎藤村が、「椰子の実」の詩を作ったという故事があるのだ。史実を元にした発想の飛躍が面白い。下五が現実味を醸している。

長き夜や呂律あやしき虫とめて

大草由美子

この句の前後に、〈起せどもどんぐり独楽の寝てばかり〉、〈テレビ消して色なきラジオ夜は長し〉の句がある。発想が個性的だ。しかしその個性は普遍性を持つ。

秋が深まると、鳴く虫の声にも乱れが出て来よう。それを「呂律あやしき」と表わしたのは適確だ。同時にその虫が作者とも居る、という下五の表現も説得力をもって読み手に伝わってくる。

行きあひの空に秋思のさだめなく

宮沢 治子

「行きあひ」は季節が隣り合った両季にまたがること。そういう行きあひの空を眺める作者に、ふと秋容の思いが萌した。しかし秋思に特定はない。〈秋思あり真火風に燃えやすく 麦南〉から、〈秋思やがて父母を恋ひをりにけり 蟬之助〉まで用例は限り無い。作者はそれを「さだめなく」と表現した。みごとに解釈である。